

OVERWATCH®

BASTET



バステト 作 MICHAEL CHU



作者

MICHAEL CHU

イラストレーション

ARNOLD TSANG

アートワーク

BENGAL

デザイン・レイアウト

BENJAMIN SCANLON



何日も待ち続けた甲斐あって、アナの標的、アブドゥル・ハキームの姿が確認された。場所はカイロの街中。古の面影を今に留める、かつての王侯貴族の宮殿だ。ハキームはそこで王さながら権力を振りかざし、街から全てを搾り取ることで私腹を肥やしていた。ところが、アナが標的を取り押さえる機会に恵まれる前に、一人目の亡霊が姿を現した。ジャック・モリソンだ。マスクをつけ、自警市民“ソルジャー76”を名乗ってはいたが、アナには一目でそれがジャックであるとわかった。

モリソンは死んだ。少なくとも世間ではそう思われていた。スイスのオーバーウォッチ本部が壊滅したとき、運命を共にしたのだと。だが、アナはそれを鵜呑みにはしていなかった。確かにジャックはなんとか生き延びていた。だが同時に、死神に追われてもいた——リーパーだ。髑髏のような白いマスクで顔を隠した、黒衣の殺し屋。

リーパーがジャックの前に立ちただかると、アナはその間に割って入った。黒い刺客につかみかかり、地面に組み伏せる。いざマスクを剥ぎ取ると、そこには見知った顔があった。生きた人間とは思えぬ形相をしていたが、間違いない。ガブリエル・レイエス。かつての友人にして、同じ釜の飯を食らった同志。ジャックと同じ程度には昔から知る男だ。そしてガブリエルはまさに亡霊のごとく、煙のように消えていった。

ガブリエルとジャックは彼女にとって姉弟同然の存在だった。そんな二人が、実は死んでいなかったとは。

——私も人のことは言えないか。二人に死んだものと思われていた。

アナは深く息を吸い、周囲に目を走らせた。壁には銃撃戦の跡が刻まれ、床のタイルは派手に割れている。大勢いた屋敷の警備員、つまりハキームの用心棒達は、子供が放り投げた玩具のようにあちこちに倒れていた。ジャックは中庭の真ん中で、これといった表情を浮かべずに立っていた。

「全員仕留めた」

近くに倒れていた傭兵の持ち物を調べながらジャックは言った。

ガブリエルと
ジャックは
彼女にとって
姉弟同然の
存在だった。
そんな
二人が、
実は死んで
いなかった
とは。



二人の間に転がっていた別の用心棒がうめき声をあげる。その刹那、アナがサイドアームを抜き、首にスリープ・ダーツを撃ち込んだ。

「どこが全員だ」

ジャックは肩をすくめた。いつもの、どこか憎めない仕草だ。

「また会えたな、アナ」

アナはフードの下で照準バイザーを起動したが、ディスプレイには何も映らなかった。彼女は苛立ち、バイザーを跳ね上げてジャックに尋ねた。

「あいつは……どこに消えた？」

ジャックも自分のバイザーを起動し、辺りをスキャンする。

「痕跡はないな」

——あいつのことはまた後で考えよう。

「ひどい怪我だ」

アナはジャックを一瞥して言った。ジャックのジャケットの背中には大きく“76”と書かれており、そのすぐ下に穴が空いていた。よく見ると、ショットガンでジャケットごと肉が吹き飛ばされている。至近距離から撃たれており、死んでいてもおかしくない傷だ。だが、ジャックは驚異的な自然治癒力を有している。アメリカ軍に所属していた頃に受けた、強化兵士実験の賜物だ。すでに再生が始まっており、ピンク色の新しい皮膚が傷口を囲っていた。しかし完治とまではいかないようだ。一番傷がひどいところは、壊疽して肉が黒ずんでいた。

「大丈夫だ」

ジャックは唸るように言った。

「俺たちの体はそうヤワじ

ゃない」

——俺たち……か。

アナは思った。かつての親友が生きていたという事実をジャックは早くも受け入れたらしい。

——それとも、はじめから知っていたのだろうか？

アナの思考はサイレンの音で遮られた。こちらに向かって

「離れた方がいい。誰かが通報したようだ」

ジャックはアナの提案にうなずいた。

「道案内は任せる」



一時間後、アナとジャックはカイロの路地裏にいた。人目につかぬよう腰をかかめ、付近の様子を窺う。ホバータクシーが勢いよく飛び交う車道。歩道ではロボットのラクダが市民を乗せて歩いている。見上げると、町の富裕層を運ぶ飛空艇や、先ほどの銃撃戦のために動員されたであろう監視ドローンが慌たたく宙を行き交っていた。

アナは勝手知ったる様子で細い路地を進み、迷宮のように入り組んだ抜け道や通路をすいすいと歩いていった。時折上空を見上げては、タカのように旋回するパトロールに目を光らせる。彼女は初めて、この街のつぎはぎの基盤をありがたく思った。オーバーウォッチの介入から十年を経ても、カイロはいまだ復旧の途上にある。この街の現状は、アナが祖国に戻った理由の一つでもあった。自分にはどうすることもできなかったとはいえ、アナはオーバーウォッチが残した負の遺産に責任を感じていた。

今は使われていない冷却塔の一つが落とす影の中に入れば、昼間の厳しい日差しはいくらかしのげた。アナはこの土地の暑さに慣れていたが、ジャックには堪えるようだ。彼が受けた遺伝子操

作は、様々な気候への適応力も高めるはずだったが……そういえば、とっくに止まっているはずの出血も未だ続いているらしい。包帯代わりに腹部に巻いたシャツから血が滲んでいる。

「もっと自分を大事にしたらどうだ？」

アナはたしなめた。

「アンジェラのようなことを言う」

ジャックは不服そうに言い返した。

警察車両が目の前を通り、アナは足を止めた。回転灯の光が

自分には
どうすることも
できなかった
とはいえ、アナは
オーバーウォッチが
残した負の遺産に
責任を感じていた。

遠ざかり、危険が去ったことを確認すると、ジャックに進むよう合図した。

「俺たちを探しているのか」

ジャックは額の汗を拭いながら聞いた。

「十中八九、そうだろうな」

と、遠ざかる車を横目に見ながらアナは頷いた。

「だが、この辺りは治安が悪い。警察も手が回らないだろう」

——それもまた、私たちが残した負の遺産。

ジャックは何歩か遅れてついて来た。壁に身を預けながら歩いている。

「ブラハを思い出すな」

「今度は抱えてやらないぞ」

とアナ。

「しっかりしろ、ジャック。ついて来い」

そう言って物影から飛び出し、道路を渡る。ざらつく太陽。灼けた敷石。上からも下からも灼熱が二人に襲い掛かる。

再び物影にすべり込むと、アナが再び口を開いた。

「ブラハの件はそなたが悪い。ラインハルトの図体で隠密行動などできるわけがない。何を考えていたのやら」

アナはジャックの反論を待った。しかし相槌ひとつ返ってこない。振り返ると、ジャックは地面に倒れこんでいた。

——勘弁してくれ。

ジャックのもとに駆け寄り、何とか立たせようと腕を強く引っ張る。

「ジャック、起きろ」

しかし、返事はない。

アナはジャックの腕を肩にかけ、担ぐようにして立たせると、そのまま路地を進んだ。



ジャックはゆっくりと目を開けた。軍隊に入る前から小さな物音ひとつで飛び起きていた彼らしからぬ、深い眠りからの目覚めだった。部屋には薄っすらとした明かりが灯っている。上半身を起こしてみると、寝かされていたのは古い軍用の簡易ベッドだった。くたびれた毛布が申し訳程度にかけてある。脇腹がえぐれるように痛んだ。

「やっと起きたか」

そう言ってアナが近づいてきた。猫のように物音一つ立てない。

そもそも向こうも 会いたいとは思わ んだろう。 彼女からすれば、 私達は過去の 亡霊に過ぎない。

「紅茶でもどうだ？」

「それよりウイスキーがいい。あればだが」

アナは呆れたような表情を見せて返す。

「そなたのために常備しているとでも思ったか？」

「紅茶でいい」

ジャックはさっきより控えめな声で答えた。

「結局ここまで担ぐ羽目になった」

アナは肩をほくしながら言った。

「今まで何度も撃たれてきたが……こんな感覚は初めてだ」

ジャックは顔をしかめながら体を動かし、傷口を見ようと体をひねった。脇腹から背中にかけて、三つの大きな裂傷が交差するように走っている。傷口は黒い糸で縫い合わせてあった。

「妙な傷だ。医者に診せた方がいいだろう」

アナはローテーブルの方へ行き、凝った装飾がほどこされた金のヤカンを電気コンロに載せた。

「医者もどうしていいかわからんだろう」

ジャックの表情は険しい。

「ジューグラー博士のところならそう遠くない」

アナが提案した。

「担いでいくのはごめんだがな」

「医者には行かん」

と、ジャックは拒否した。

「アンジェラのところならなおさらだ」

——行ったところで、何をどう説明すればいい？そもそも向こうも会いたいとは思わんだろう。彼女からすれば、私達は過去の亡霊に過ぎない。

「傷を縫わせてもらったが……」

意識が戻った
当初は、自分が
何者かすら
わからなかった

とアナは申し訳なさそうに言った。

「あまりそういった必要に迫られてこなかったものでな。縫合はそれほど得意ではない」

ジャックは凸凹の縫い目に指を這わせた。

「肉切り包丁でも使ったのか？」

「そこまで言うなら、次からは自分でやればいい」

「手が届かないな」

ジャックは決まり悪そうに言った。

「では文句を言わないことだ」

アナは一旦そこで言葉を切る。

「それに、ひとりでに治るはずでは？」

「本来であればな。弾に生物剤が込められていたのかもしれない」

ジャックは頷きながら答えた。

「本当にジューグラー博士に診せなくていいのか？」

「俺たちがなぜ生きているか、というところから説明しなければならぬだろう」

とジャック。

「腕のいい医者だ。一人二人生き返ったところで驚きはしないだろう」

そう言ってアナは笑った。

「アンジェラは勘弁してくれ」

ジャックはそこでその話題を打ち切った。

そしてアナの家、と呼んでいいのだろうか。ジャックは自分があるその空間を見渡した。そこには戦闘用の装備、軍の払い下げ品、偵察機器が、いくらかの生活感を漂わせる品物などと共に置かれていた。アパートというよりも、考古学の発掘現場といった趣だ。はるか昔に作られたと思しき部屋は石柱によって支えられ、壁には象形文字が彫られている。比較的新しいものは、誰かのいたずら書きだろうか。ローテーブルにはアナが飾った細々とした古代の遺物が置かれていた。どれも保存状態がいい。羊の頭をあしらった、淡い乳白色の石のフタがついた壺。その隣には黒地にところどころ金が入った仮面。気性の荒い猫の女神を祀る品らしい。そして赤茶けた土を使った、いくらか欠けた陶器の花瓶。鮮やかな緑色をした、小さなハヤブサの置物もある。

ジャックはそれらの骨董品をつぶさに眺め、感想を漏らした。

「子供の頃に母親が連れていってくれたニューヨークの博物館を思い出す」

その時の旅行で特に印象に残っている場所だった。博物館には古代エジプトの神殿を丸ごと、そっくりそのまま運んできたものが展示されていた。その周りをぐるぐる走って遊んだのを覚えている。懐かしい思い出に顔がほころんだ。

アナは青地に赤い格子柄が施されたマグを差し出した。

「ネクロポリス——“死者の都”だ」

「いみじくも、といった感じだな」

とジャックは笑い、ささやかなギャラリーを指差して問う。

「ここにあるのは？」

「越してきた時からあったものだ。捨てようと思ったが捨てられなかった。何千年もの時を経たものだと思うと忍びなくてな。時は流れ、いくつもの帝国が栄えては滅びたが、この品々は今も残っている。ファイサル博士のところに送る前に手入れしてやろうと思ったのだ」

「ずっとここにいたのか？」

紅茶に息を吹きかけ冷ましながら、ジャックが尋ねた。

「ポーランドの病院を出てからはな」

紅茶をすするジャックを見守りながらアナは頷いた。

「砂糖はあるか？」

苦かったのか、ジャックが顔をしかめる。

アナは聞き流して話を続ける。

「意識が戻った当初は、自分が何者かすらわからなかった。名前を訊かれても答えられず、最初はヤニナ・コヴァルスカ——“名無しの権兵衛”と呼ばれていた。何ヶ月もの間、病室のベッドの上で痛みや混乱と戦っていた。私は運がいいとドクター・リー……主治医に言われたよ。望みうる限りの幸運だ、とな。頭蓋骨にガラスと銃弾の破片が埋まった患者としては、ということだが」

アナは当時のことを思い出すと、感覚を失ったはずの目が疼くのを覚えた。

「ずいぶん探したんだぞ」

沈んだ声でジャックは言った。

「使える手はずべて使った。ガブにいたっては、別方面でマクリーにも調べさせていた。それでも手がかり一つ出なかった。皆に言われた。“アナはもういない。諦めて受け入れるべきだ”と。だが、俺はお前が生きているとわかっていたんだ」

——やはり俺は間違っていないかった。

ジャックは思った。

「私の存在が表に出ないよう、ドクター・リーが手回ししてくれたからな。延々と訴え続けたのさ。危険な連中に追われていると」

「その危険な連中というのは俺のことか？」

無邪気なふりをしてジャックが尋ねる。

「そなたなど子猫も同然だ」

アナは笑った。

「最後には記憶を繋ぎ合わせ、何があったのか思い出した。だが、その記憶のどこまでが事実で、どこまでが想像で補ったものかはわからない。任務の記憶は戻った。我々は敵のスナイパーに足止めを食らい、私があぶり出すことになった。そこから狙撃の準備に入ったところまではすぐ思い出したのだが、その先がなかなか……まるで、心のどこかで思い出したくないと願っているかのように」

ジャックは手にしたマグに視線を落とした。

「相手のスナイパーは顔見知りだった」

ジャックの表情の変化に目を光らせながら、アナは言った。

「そなたも聞いているだろう」

「アメリだろう」

ジャックが頷く。

「知っているさ」

彼はその名前以外にも色々とはいたが、アナには言わずにおいた。

「ジェラルドが不憫だ」

アナは深々とため息をついた。

それからしばらくは二人とも無言のままだった。それぞれの紅茶からたちのぼる湯気が、悠久の昔から存在する部屋に消えていく。

「なぜエジプトに来た？」

ようやくアナが尋ねた。

「お前を見捨てた自分が許せなかったのさ。カイロに賞金稼ぎがいるという噂を聞いて、もしかすると……とな」

ジャックはそう言ってマグを置いた。

「そなたは昔から諦めが悪かったからな」

たしなめるようにアナが答える。

「それで何度も痛い目に遭っただろう」



「ガブリエルの奴が動いている。タロンはますます力をつけている。奴らを止めなければ、俺たちの苦しみ……お前の苦しみを清算するんだ。一つ残らず。この手で奴らを八つ裂きにしてやる」

ジャックの熱のこもった言葉が石の壁に響く。彼は両の拳を握りしめ、それからまたゆっくりと緩めた。

「だが俺一人では無理だ。力を貸してくれ」

アナは腕を組んだ。

「立っているのもやっただろう。街中で気を失ったのだぞ。今は傷を癒すことだけ考えろ」

「このままでいいわけがないだろう。他の連中と同じでいいのか。俺たちが一生をかけて築いたものが、バラバラに壊されてしまったんだぞ。挙げ句の果てに逆賊扱いだ」

「そなたのような者ばかりではないのだ」

いきり立つジャックに、アナはそう答えた。

「過去は過去として、前に進める者もいる」

「前に進むためにやっている」

とジャックは言い返す。

「熱くなっているだけだろう」

とアナ。

「頭に血が上っている。もう少し休んでいろ。後でまた話せばいい」

「後で？」

ジャックの目が手にしたマグに飛び、それからまたアナに戻った。

「まさか……？」

ジャックは意識を失い、簡易ベッドに倒れ込んだ。

ジャックが眠りに落ちるのを待ってから、アナは彼の両足をベッドに載せ、頭を持ち上げてその隙間に枕を滑り込ませた。そして最後に、ごわつく硬い毛布をかけてやった。ジャックの体にはアナの知らない傷が増えていた。髪の毛もずいぶん薄くなり、銀色がかった白髪になっている。眠っている間、彼の“ソルジャー76”という人格はなりを潜め、自分の知るジャックを感じることができた。

アナは空になったマグを手にとると、ジャックをそっと眠るがままにした。

陽が落ちた頃、アナは帆布の袋を担いで真っ暗な建物に戻ってきた。明かりがつかないのと、いつにも増して墓所のように感じられる。入口をくぐり、廊下を通って主室に入ると、まず目に入ったのはジャックだった。シャツを脱ぎ、上半身裸で歯を食いしばりながら片手で腕立て伏せをしている。包帯は取っ払われ、丸めて簡易ベッドの上に置いてあった。怒ったように充血した肉と、壊疽して黒くなったところが混じり合った傷口は、アナの下手な縫合で塞がれたままだ。

「傷口が開くぞ」

アナは指摘した。

「体がなまって落ち着かなかったんだ」

とジャックは弁解する。

「二日も寝ていたのだ。腹が減ったろう」

「ハンバーガーがいい。今食えるなら死んでもいい」

アナは呆れた顔をした。

「まあ、好き嫌いは言わないがな」

ジャックは笑みを浮かべて続けた。窮地を脱しようとするときによく見せた笑顔だ。昔からこの男は子供のようなところがあった。

アナは持っていた袋から食事の入った紙の容器を取り出し、ジャックの正面のローテーブルに並べた。にわかに食べ物の匂いが広がる。エジプトならではのファラフェルと豆。羊のひき肉とオニオンを詰めたパン。まだ焼きたてなのだろう。ほくほくと湯気があがっている。

「作ったのは私ではない。安心しろ」

「ありがたい。ささやかな奇跡だ」

アナの言葉を聞き、ジャックは笑った。

アナもいつの間にか一緒に笑っていた。

ジャックは食事の時間が限られているかのようにがつつと料理をかき込んだ。アナも少し口にしたが、お互いほとんど言葉を交わすことはなかった。そうして料理をすべて平らげると、ジャックはそれまで腰かけていた箱に座ったまま後ろにもたれかかり、質問の態勢に入った。

「なぜ生きていると教えてくれなかった？」

ジャックは切り出した。

「そなたにはわからないかもしれない」



「ガブリエルならあるいは……そなたとはまたタイプが違うからな」

ジャックは表情を変えずに続けた。

「ファリーハには？ 言ってないんだろう？」

「それがいちばん辛い」

アナはそう言ってため息をついた。それからおもむろに立ち上がると、机の方へと向かっていった。机の上には枠に入った写真が置かれていた。写っているのはアナと、その背におぶさりながら笑う彼女の娘。二人とも大きく腕を広げている。あたかも鳥が空を飛んでいるかのように。

「ファリーハは……アマリ大尉の帰りを待っていたことだろう。だが待ち人はもういない。撃つのをためらったあの瞬間、私は変わってしまった」

「自分を責めるな」

ジャックが穏やかに言った。

「その時は知る由もなかったんだ」

「慰めなどいらん」

アナはピシャリと言い返した。

「あれは私の落ち度だ。一生を棒に振るような過ちではないかもしれない。だが、責任は負わなければならない」

「そうだとすると、俺たちはお前に戻ってきてほしかった。結局のところ、お前がいないとやっていけなかったんだ」

ジャックはそう言って、彼女の肩に優しく手を乗せた。

「オーバーウォッチにはお前が必要だった。そして今は、この俺にも」

ジャックの顔には必死さが滲み出ている。

「起きてしまったことは変えられない。復讐に身を投じて、志半ばで死ぬのが関の山だぞ」

「そうかもしれん。だが戦わなければならないんだ。他の連中は皆諦めた。だが俺は違う」

——ジャックは私のことも責めている。

彼と話すうちに、アナはその事実気づいた。

「頑固な男だ」

「お前も戦わずにはいられなかったんだろう？」

ジャックは続けた。

「だからハキームの宮殿にいた」

「一度は静かに生きようとした。できることなら、娘の傍で平和に過ごしていたかった。だが、ここでの暮らしが長くなるほど、目を背けていられなくなった。この街に起きた出来事は、私たちに責任がある。アヌビス計画を潰してから、エジプトの傷は少しも癒えていない」

アナはそう言って立ち上がると、ジャックに背を向けた。

「人々の暮らしは厳しくなる一方だ。誰もがハキームのような悪党の食べ物にされている。自分にできることがあるというのに、見て見ぬ振りをしてはいられない」

「正義のために戦っているんだろう。俺と同じだ」

ジャックの言葉に、アナは眉をひそめた。

「復讐は正義ではない」

ジャックは両手を上げてみせた。

「追っているものは同じだ。ハキームがなぜガブリエルと会っていたと思う？ タロンに雇われているからだ。この街の腐敗は広がり、やがて世界を巻き込む。それが世の常というものだ」

「ハキームが仕切る犯罪組織は、カイロを苦しめる元凶となっている。警察や政府は見て見ぬふりをし、賄賂を受け取っている連中までいる。食料援助は本当に必要な人々には届いていない。医療制度などないも同然だ」

アナは首を振った。

「そんな状況で何もせずに立ち去れるか？ そなたならどうだ、ジャック？」

「奴らを排除しない限り、カイロもこの世界も苦しめ続けるんだぞ！ 大局を見失うな」

ジャックが熱のこもった声で反論する。

「自分が何を言っているかわかっているのか？ 昔のそなたならそんなことは言わなかった」

対するアナの言葉には、非難の響きがあった。

「結果ではなく、過程が大事だったはずだ」

「時代は変わった」

ジャックはそう言い放った。

「一緒に来てくれ。断るなら俺はもう行く。ずいぶんと時間を無駄にしてしまった」

「私は行かない」

それがアナの答えだった。

ジャックは黙って彼女を見つめ続けた。

「狙撃手は最も大きな脅威を最初に取り除く。それがお前の仕事だった」

やがてそう言うと、彼はズタズタのジャケットを拾い上げた。

「つまらんチンピラどもの相手をして遊んでいたのなら、そうすればいい。俺には戦うべき相手がいる」

そして彼は、その場から飛び出した。



ジャックが去った後、アナはコンピュータの電源を入れた。ジャックが使ったまま残されていた画面は、リーパーの出現場所や動向について書かれた記事で埋め尽くされていた。一体誰がジャックに情報を提供しているのか。そんな疑問が頭をかすめたが、

それはまた別の機会に考えることにした。記事に目を通しながら、あの白い仮面の下に隠された、すっかり様変わりした顔を思い出した。

—ガブリエル……そなたに何があったのだ？

リーパーの起こした、とある襲撃事件の被害者が得体の知れない傷に苦しんでいるという記事があった。ジャックと同じ症状だ。

—あのエセ科学者だな。

嫌悪感がアナを支配した。

他の記事からは、リーパーに関する目新しい情報は得られなかった。ジャックの頭の中を垣間見ることができただけだ。彼は腐敗した経路やいかかわしい仲介により、企業や政府機構、金融機関がクモの巣のように絡み合った迷路に迷い込んでいた。決してジャックが得意とする分野ではない。白と黒、確固たる事実、曖昧さの入り込む余地のない明確な決断こそ、彼が好む物事の在り方だ。

この手の仕事は、昔からガブリエルの領分だった。

—昔のようにはいかないがな。

アナは自分に与えられた選択肢を吟味した。心の中では、このままこの街に残りたいと思っていた。エジプトは崩れかけている。もう数年もすれば、街は混乱に飲み込まれ、ハキームのような金の亡者や犯罪者たちにズタズタにされてしまうだろう。彼女は“モズ”という名を名乗り、賞金稼ぎの立場から物事を変えようとしていた。ゆっくりとはあるが、着実な変化を起こせていると思う。街を離れれば、その苦勞がすべて水泡に帰す。

—だが、ここにいるのは私だけではない。ファリーハのような人々もいる。戦う力を持った人々が。私でなければ、というわけではない。

またプライドが邪魔をする。

ソルジャー76の記事に目を戻すと、一つ気になる記事があった。ルメリコ社の最新の発電所襲撃に関するものだ。市場のご真ん中で銃撃戦が起き、大きな被害を出した。重傷者多数、建物への被害も甚大。すべてこの男の仕業だとされていた。しかし、地元ドラドの少女の証言も伝えられている。周りの大人たち誰もがその男を恐れるなか、この子だけが彼をヒーローと呼んだのだ。

—必ずしも私でなくていい。だが、人々には信じられるものが必要だ。



それは女神バステト。
守護神だ。



やらなければならないことが見えた気がした。ネクロポリスで見つけた宝物が並べられた粗末な棚の前に立ち、猫の仮面を手にとった。それは女神バステト。

守護神だ。

ジャックはすっかり眠りについた街を歩いていた。ひんやりとした夜風が心地いい。昼間の熱気が嘘のようだ。確かに夜遅くではあったが、街の中心部とは思えないほど周りは静かだった。食べ物や、ガラクタの山から拾ってきたオムニックのパーツ、布や織物、様々なものを売る屋台が並んでいるが、どれも閉ざされて久しい。戒厳令こそ出していないものの、住人らは日没後に外出しないよう推奨されていた。リーパーと相対した後、暗闇を見ると影がうごめいている気がした。

ジャックはもうずいぶん長いこと追跡を続けていた。情報を集め、見つけた手がかりをたどっていく。その繰り返しだ。これまでは存在を知られていないという利点があったが、状況は変わった。タロンやその仲間たちは、彼に追われていることに間違いなく気づいたはずだ。自主的ではないが、カイロに来てからまともに寝たのはあの一日だけだった。

——アナに一服盛られるとはな。

どうも落ち着かない。一ヶ所に長く留まるのはリスクが高い。ガブリエルに襲われる可能性があるとおってはなおさらだ。移動しなければ。

夜の闇に朝の気配が混じり、満月が建物の輪郭に隠れようかという頃、ジャックはようやくアナのもとへ戻った。中に入ると、彼女はコンピュータに向かっていた。

「忘れ物でもしたのか？」

振り返りもせずにアナが訊く。

「ハキームを捕まえるのを手伝ってやる。それが終わったらリーパーを追うぞ」

ジャックは彼女に近づいてそう告げた。

「この街の安全が確保できたら、だ」

とアナが訂正する。

「そなたと共に行くのは、ここの問題が片付いてからだ。そのためにはハキームだけでなく、手下も捕まえねばならぬ。人々の安全を確かめるまではどこにも行かない」

ジャックは唇を固く結んでアナの意見を検討し、それから口を開いた。

「だったら奴の屋敷に乗り込んで、手下ごと一掃すればいい。逃げも隠れもできないうちにな。その方が話が早いだろう」

ジャックの提案に、アナはかぶりを振った。

「力押しではダメだ。この間と同じ轍を踏む気か？」

「ガブの邪魔がなければうまくいったさ」

とジャックは返した。

無言のまま、アナの眉が吊りあがる。

それを見て、ジャックはやれやれとため息をついた。

「では、どうする？ 考えがあるなら言ってくれ」





「まずは一番下から攻め、少しずつ上に行く。徐々に包囲網を狭めていき、ハキームを干上がらせ、白日のもとに引きずり出す。奴を守っている連中ともどもだ。これならどうだ？」

ジャックは先程よりも長いため息をついた。

「いつだったか、ガブに言ったことがあってな。上の連中はストライクコマンドーの人選を間違えた」と

「そなたの頭にあったのはガブリエルであって、私ではなからう」

とアナ。

「ラインハルトかもしれないぞ」

ジャックはニヤリと笑みを浮かべた。

「恐ろしいことを言わないでくれ」



先日の襲撃事件以来、ハキームは宮殿に戻るのを控え、街中のアジトを転々とするようになっていた。ジャックはそうした拠点であらかた突き止め、計画に最も都合の良い場所にアタリをつけると、そこを高所から見渡せるところに部屋を借りた。アナもジャックも住み心地にはこだわらなかった。最初から部屋にあったものといえば、壊れかけの椅子が二脚と木箱が一つくらいのもの

だった。二人は一つの寝袋で代わる代わる睡眠をとった。二日目が過ぎると、アナの強い要望で電気コンロが持ち込まれた。紅茶を沸かすためだ。

一週間という短い時間で、彼らはハキームとつながりのある連中を多数捕らえ、組織の勢力を少しずつ削っていった。しかし、何者かがハキームの組織を狙っているとの噂が広まり、次第にペースが落ちていった。ハキームはさらに地下深くに潜り、一段と用心深くなった。待つこと以外にできることはなかった。

アナは退屈を苦しなかった。スナイパーである彼女は耐え忍ぶことに慣れていたし、自分一人の時と違って、体を動かしたり仮眠をとったり、外出することさえできた。我慢どころか、十分すぎるほどの自由があった。一方のジャックは、なかなか落ち着いてはもらえなかった。窓から地平線を幾度となく見るも、彼の目が探し続けているものはただ一つ。

—ガブリエル。

「何か動きは？」

ジャックが顔を上げて尋ねた。教師に見られたら注意でもされそうな姿勢で椅子にもたれかかっている。手に何かを持っているようだ。

「相変わらず尻尾を出さない。ところで、それは何だ？」



「なに、昔を思い出してただけさ」

返事をしながら、ジャックは何かの束を投げてよこした。写真だ。どれもくたびれて、折り目やシワだらけだった。長年持ち歩いていたらしい。

一番上の写真はガブリエルを交えたアナとジャックだ。三人ともまだ若く、楽観的な雰囲気さえ感じられる。ただ、ガブリエルの顔にはリーダーの重責がすでに表れていた。確か、リオ・デ・ジャネイロで大きな勝利をあげたときの写真だ。

「あのビーチはよく覚えている。懐かしいな」

アナは笑みを浮かべた。

「三人とも表情が硬い。笑えるな」

「いい写真だろ」

ジャックも笑う。

——よかった。彼はまだ笑うことができるのだ。

だが、次の写真を見た瞬間、アナは驚きのあまり落としてしまいうようになった。初めて目にする写真だったが、アナにはすぐにもわかった。この写真のジャックはさっきよりずっと若い。休暇のために軍用機から降りてきたところだろう。写真にはもう一人写っている。カジュアルな、黒いボタンアップシャツを着た黒髪の男性。ジャックはその肩に腕を回している。

——ヴィンセント。

「ヴィンセント……すっかり忘れていた」

アナは漏らした。

「今も彼のために口ウソを灯しているのか？」

ジャックは首を横に振る。

「そうしたことはしていない」

「一度も会ってないのか？ 気になっていただろうに。その気になれば色々調べられたはずだ。ガブに頼めば、ブラックウォッチのエージェントをつけてくれたらう」

アナがそこまで言うと、ジャックは険しい顔を向けてきた。

「わかった。これ以上は訊かない」

ジャックは笑った。

「結婚したんだ。家族と幸せに暮らしている。俺も嬉しいさ」

アナは得心がいかなかった。昔、ジャックは彼のことをよく話してくれた。戦争はもうすぐ終わる、そうすれば普通の暮らしに戻れるかもしれない。そのような夢物語を描いていた。

——しかし、我々のような人間に普通の暮らしが与えられることはなかった。

「俺じゃヴィンセントを幸せにしてやれなかった」

ジャックはため息交じりに言った。

「俺にとっては任務が何よりも大事だったし、あいつもそれがわかってた。俺が戦ってきたのは、あいつのような人々を守るため……それが俺の払った犠牲だ」

「お互いにままならぬ人間関係を抱えたものだな」

アナは無意識のうちに、左手の、かつて指輪のあった場所を親指でさすっていた。

「少なくとも、お前とガブには家族がいる」

それきり、二人はしばらく口を開かなかった

しかし、我々の
ような人間に
普通の暮らしが
与えられることは
なかった。

アナがふと窓の外を見ると、よく知る男の姿がアパートの区画に入るところだった。

「奴だ」

アナはジャックに写真を返し、ジャックはその写真を大事そうに上着の内ポケットに入れた。

「用意はいいか？」

ジャックはマスクとバイザーをつけ、壁に立てかけていたヘビー・パルス・ライフルを持ち上げた。

アナも自分のライフルを手にした。ジャックのものよりは多少扱いやすい武器だ。それを肩にかけ、手榴弾をいくつかベルトに取り付けると、最後に袋からあるものを取り出した。あの黒と金のマスクだ。

「それを持っていくのか？」

とジャック。

「そなたを見て思いついた。“ソルジャー76”は単なる自警市民などではない。世間はその名を知っている。そなたの敵は、その名を恐れている。ハキームにもタロンにも他の誰にも、私がいなくなった途端カイロで好き放題させたくはない。私も新たな仮面をつけることにしたのだ。今度はハンターの仮面ではなく、守護者の仮面だ。人々を守るために私が残していく象徴……それが“バステト”だ」

「俺のマスクは、相手を恐がらせる意味もあるんだが」

ジャックはそう言って笑みを浮かべた。

「ただの老婆よりも、バステトの方が恐ろしかろう」

「老婆ほど恐ろしいものはないと思うがな」

とジャック。

「どの口が言う」



一週間後、アナとジャックはネクロポリスの拠点を引き払おうとしていた。アナの荷物はあらかじめ置いていくことにした。持っていくのは、これからの旅に必要なものだけだ。ハキームの犯罪組織は解体され、本人も投獄された。ニュースでは、ハキームを捕らえてその悪行の限りを暴いた“バステト”と名乗る守護者の動向が伝えられるようになっていた。いよいよ政府も重い腰を上げた。

「これはどうする？」

ジャックはエジプトの遺物が飾られている棚を指差した。

「そなたの面倒を見るだけで手一杯なのに、そのようなもので持っていけというのか？」

とアナ。

「すぐには見つかるまい。きちんと管理してくれる者が見つかるまで放っておいて構わんさ」

「ファリーハのことか？」

ジャックは頭に浮かんだ名を口にした。

「会ったのか？」

「いや……手紙を残した」

とアナ。

「本当にそれだけでいいのか？次いつ会えるかわからないんだぞ」

——会えるのだとすれば、な。

アナはため息をついた。

「最初に出した手紙には返事がなかった」

ジャックの顔が曇る。

「いづれわかってくれるだろう。あの子は今も、お前のことを愛している。サムには何か言ったのか？」

「そのうち言うさ。気が向いたらな」

アナは答えた。

「私はあの人的人生をもう十分引っかけ回した。それに私たちは皆、別れを告げるのが得意ではなかった。そうだろう？」

「ラインハルトよりましだと思うがな。あいつは別れを言わないようにするために生きていたかと思えん」

「達者にしているのか？」

アナは尋ねた。

「話せば長くなる」

とジャック。

「だが、これからは時間を気にしなくてもいい」

アナは頷いた。

「出発する前に一つだけはっきりさせたいことがある」

アナが言った。

「そなたと一緒に行く。だが、果たしてこれが正しい選択かと問われれば、正直わからない。タロン、オーバーウォッチ、ガブリエル……私は一度すべてを手放した。苦しかった」

そこまで言うと、アナは一旦口を噤み、それからまた言葉を続けた。

「最初にネクロポリスに来たとき、私が見つけた過去の遺物は大半がボロボロの状態だった。救えるものは救ったが、それ以外は捨て置くしかなかった。本当に大切なのはそういうことだ、コマンダー」

「その呼び方はやめてくれ」

ジャックは嫌そうに言った。

「とにかく行こう。昔の仲間たちに挨拶しないとな」



二人は入口を封じてネクロポリスを後にした。彼らが去ってずいぶん経った頃、埃っぽい部屋の暗がりの中から古代文明の遺物が見つかった。その中心には、とある女神をかたどった黄金の仮面があった。カイロの人々の心に宿り、害をなそうとする者たちが恐れを抱く、決して色あせることのない象徴——守護者バステト。







BILZZARD[®]
ENTERTAINMENT